

オックスフォード、ボードリアン・ライブラリー、Laud Misc. 247写本について  
——『フィジオログス』から『ベスティアリウム』へ挿絵の系譜をめぐって——

長友瑞絵（東京藝術大学）

『ベスティアリウム（動物誌）』は、西洋中世における動物シンボリズムの図像典拠として中世を通じ長く読み継がれた書物である。特に13・14世紀には、イングランドを中心に豪華版写本も含め多数の挿絵入り写本が制作されている。同書は2世紀頃アレキサンドリアで成立したキリスト教的博物譚『フィジオログスPhysiologus』（「博物学者」の意）のラテン語Bヴァージョンテキストを直系の祖先とし、12世紀末に派生したとされる。この移行期の写本については、個々の写本のテキスト分析が進められているのに対し、挿絵に関する美術史的研究は十分に進められていない。そこで本発表では、テキストの系譜上『ベスティアリウム』のいわば起点に位置づけられる『フィジオログス』ラテン語B-Isヴァージョンの写本グループから、12世紀初めに制作されたオックスフォード、ボードリアン・ライブラリー、Laud Misc. 247写本を取り上げ考察する（以下Laud本と表記）。先行研究のテキスト分析を参照しつつも、挿絵サイクルと個別図像という各側面からその特質を考察することで、『ベスティアリウム』へと展開する挿絵の系譜の一端を明らかにすることを目的とするものである。

『ベスティアリウム』や『フィジオログス』のテキストでは、様々な動物（ライオンなど実在の動物から、ユニコーンなど空想の動物、鳥類、植物、鉱石も僅かに含まれる）について、それらの外観と性質を説明する記述と、そのキリスト教的寓意・教訓による注釈が語られる。その全体構成は、これらの動物それぞれを主題とする各編が連なり百科全書的な形をとる。なお挿絵については、各編につき一点が対応するテキストの前に置かれるのが通例である。

本発表で考察するLaud本は、『フィジオログス』ラテン語写本のうち、イングランドで制作された最古の現存作例であり、37編を取録する。その挿絵は冒頭の「ライオン」編の一部が欠損するなど完全な形では残されていないが、各編に対し褐色インクのペン素描が付けられ、一連の挿絵サイクルが確認できる。先行研究は写本研究学が多数を占め、ベスティアリ研究の礎を築いたジェームズ（1928）が、『フィジオログス』から発展した第一世代を代表する作例として早くも重要視しているものの、近年に至るまで個別研究は進められておらず、バクスター（1998）が部分的な分析を行うのみに留まっている。従って本発表においては、美術史学側からのアプローチとして、Laud本の挿絵サイクル全体も視野に入れた上で考察を試みたい。

例えば「アンテロープ（羚羊）」編挿絵は、『ベスティアリウム』の定型では、灌木の茂みに角を取られて動けなくなったアンテロープの傍に、それを捕らえる狩人が描かれるのに対し、Laud本においてはアンテロープのみで狩人は描かれない。バクスターはこの点についてLaud本の描写は画家の誤りであると否定的解釈を与えた。しかし『フィジオログス』のプロトタイプの意図は、あくまで神の創造と福音とに照らし合わせるための、シンボリックな輪郭として動物の姿を示すことであった。また図像伝統の点からも、最古の挿絵入りラテン語写本、ベルン市立図書館、Cod.318にはアンテロープのみが描かれていることが確認できる。従ってこうしたLaud本挿絵の特色について、『フィジオログス』のプロトタイプの性質を、むしろそのまま継承していることの証左として捉え直す必要があると考える。